

VOL.56

2020 年 12 月発行

事務局

〒351-8510

埼玉県朝霞市岡48-1

東洋大学ライフデザイン学部生活支援
学科

研究室: 大学院・研究棟 5 階 5515 室
(吉田研究室)

日本精神障害者リハビリテーション学会 News Letter

INDEX

01 はじめに

02 精神障害者リハビリ
テーション学会大
阪大会 参加者報告
①

03 精神障害者リハビリ
テーション学会大
阪大会 参加者報告
②

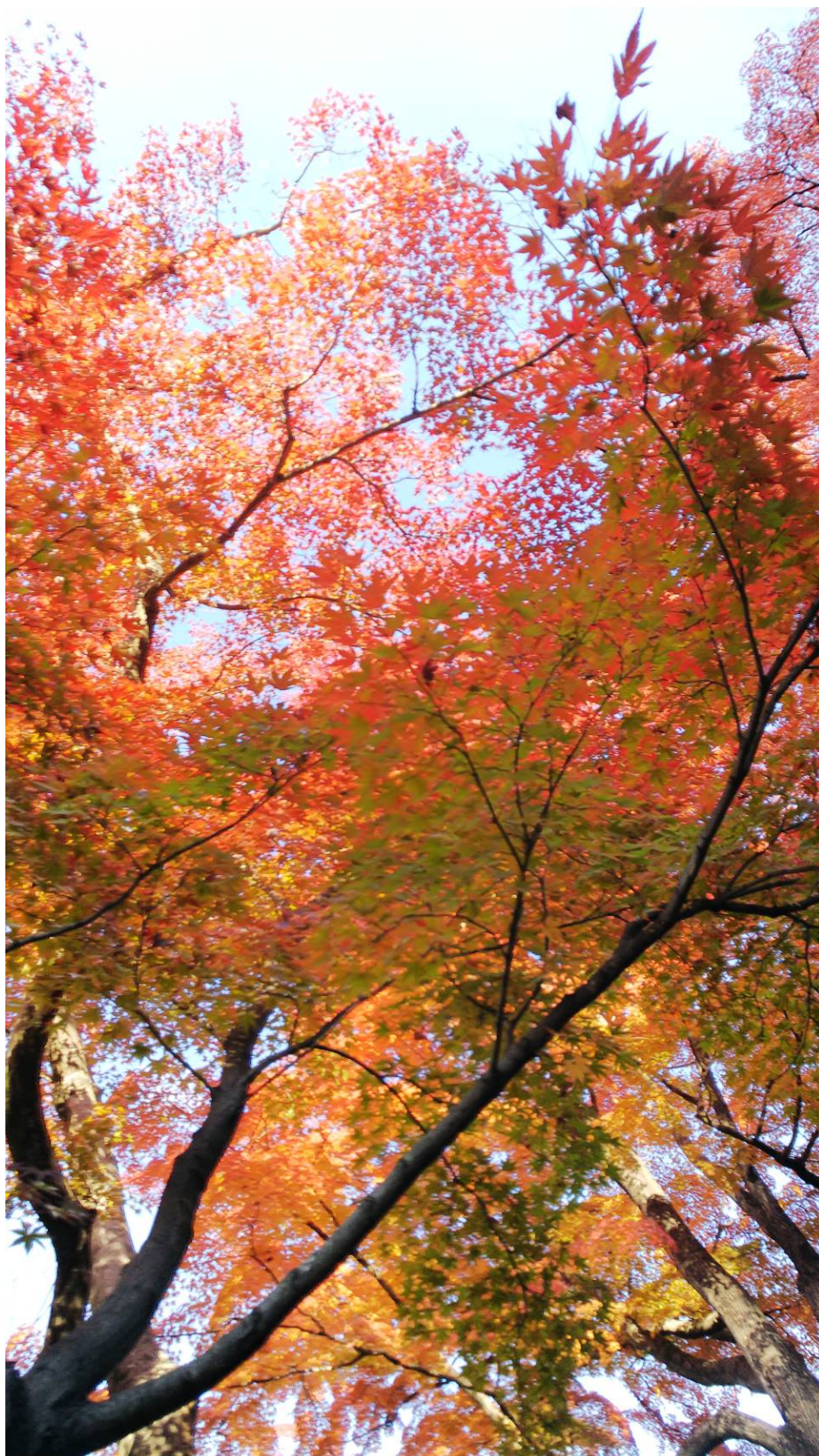
04 精神障害者リハビリ
テーション学会大
阪大会 参加者報告
③

05 精神障害者リハビリ
テーション学会大
阪大会 参加者報告
④

06 精神障害者リハビリ
テーション学会大
阪大会 研修セミナ
ー参加者報告

07 特別企画 I'm
alive!! It's my
job.

08 事務局からのお知
らせ



はじめに

日頃より、精神障害者リハビリテーション学会の活動にご理解をいただいておりますこと、心より感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行、7月の九州を中心とした豪雨による被害、先日の台風10号による被害において犠牲となられた方々に衷心よりお悔やみを申し上げますと共に、罹患、罹災された皆様の一日も早い回復をお祈り申し上げます。

この状況が一日でも早く終息へ向かいますことと、みなさまの平穏な日々が取り戻せますよう心よりお祈り申し上げます。

ニューズレターの発行が、大変遅くなり申し訳ありませんでした。

昨年中に開催されました、精神障害者リハビリテーション学会大阪大会の様子を参加者からのご報告として紹介させていただきます。

Japanese
Association of
Psychiatric
Rehabilitation
since 1993



<http://www.japr.jp>
Mail japr.jimukyoku@gmail.com

精神障害者リハビリテーション学会大阪大会 参加者報告①

精神障害者リハビリテーション学会大阪大会に参加して

株式会社アソシアディスカバリー

精神保健福祉士 政野 信基

大阪大会に参加し、特に印象に残ったものを抜粋して報告させていただきます。

会場に入り、まず自分が感じたことは、当事者の方の参加の多さである。当事者の方が参加できる雰囲気新鮮さを感じた。自主プログラム7の『リカバリーカレッジの実践を通して見えたもの』では、当事者の方はもちろんのこと、職場を飛び出して当事者の方と混ざり、学んでおられる方もおられ、やり取りがとても自然で、良い雰囲気で進行していた。枠を越えた横並びの関係性だからこそ、語り合え、リカバリーに向かっていくことができるのだなと実感した。やはり治療関係ではリカバリーは成しえないのではないかと考えさせられた。

自主プログラム11の『メリデン版訪問家族支援（Family Work）の日本における実践と今後の課題』に参加。本人と家族をまるごと支援し、一人ひとりが自分らしい人生を歩むことを促す介入方法で、しっかり体系化されており、セッションを通して家族自身が問題解決ができるようになるものであった。この技法を全国に広げていくために、全国で研修を行っていくなどのソーシャルアクションを行っており、ソーシャルワーカーとして大変感銘を受けた。

2つの自主プログラムに参加して、リカバリーしていく中で大事なことは、当事者が発言できる場を作ること、それを維持できるようにすること、それを当事者や家族と共に行っていくことなのだと考えた。長期入院せず、地域で生活し続けるためには、家庭でも地域でもその環境を作っていく必要性を感じた。

様々な発表を聞かせていただいたが、とても多様な技法、支援を全国の様々な職種が行っており、希望を持つことができた。来年度の名古屋大会もぜひ参加したい。

<http://www.japr.jp>

Mail japr.jimukyoku@gmail.com

精神障害者リハビリテーション学会大阪大会 参加者報告②

『精神障害者リハビリテーション学会大阪大会に参加して』

村岡はなこ

社会福祉法人みつわ会 ブリーゼ

2018年の東京大会へ参加し、今回2回目の参加でした。今回、自主プログラム「当事者参加によるPEAPを用いた施設環境改善プログラム～キレイになるだけちゃいませ！」で初めて事業所のスタッフと報告を行いました。自主プログラムにあたっては、早稲田大学の岩崎先生、社会福祉法人豊芯会の斎藤さん・近藤さんにご協力頂き、ブリーゼでの環境改善の報告とその手法を模擬体験するワークショップを行いました。初めての発表は非常に緊張しましたが、日々の実践を言語化することや、事業所のスタッフと協力して発表の準備を行う貴重な機会になりました。事業所のサービスの質を高めるための環境改善は、今後も継続して取り組んでいきたいと考えています。

また、2日間にわたる講演や実践報告を聞き、自身の視野の狭さを痛感しました。制度にとらわれず柔軟に新しい取り組みを行っている事業所の実践報告を聞くと、自身の狭い見識で支援の可能性を狭めているのではと、日ごろの実践を省みる機会になりました。リカバリーを信じ、希望を持つこと、そのために多くの実践から学び視野を広げることも大切であることに気づきました。

今回開催地が地元大阪ということもあり、近隣圏域のスタッフの方々が発表され刺激を受けたとともに、職種や所属を超えて応援しあえる日頃からのつながりがあることの心強さを感じました。そして、前回大会でお会いした方にお声掛け頂けるといううれしい経験もありました。今後もつながりを大切にし、実践を続けていきたいと思いました。次回名古屋大会もぜひ参加したいと思います。

<http://www.japr.jp>Mail japr.jimukyoku@gmail.com

精神障害者リハビリテーション学会大阪大会 参加者報告③

『精神障害者リハビリテーション学会大阪大会に参加して』

～オープンダイアログの実践研究の発表を終えて～』

陶 貴行

株式会社 LITALICO LITALICO 研究所

2019年11月22日（金）～24日（日）に開催された精神障害者リハビリテーション学会大阪大会に参加致しました。はじめて本学会の学術大会に参加したのは、2016年の長野大会でしたが、それ以来、実践報告や研究発表、シンポジウム等を通して、様々な実践家、研究者の皆さまと交流し、毎年たくさんの学びを得ています。本大会のテーマは、「笑（わろ）てんかりハビリテーション～たくさんの笑顔を送らせるために～」と題されていましたが、精神科リハビリテーションに関わる人々が「笑顔」になり、その日々の活動が活性化されることを願った素敵なテーマだと感じて、とても楽しみにしておりました。

今年は、口頭発表とポスター発表にて、就労移行支援事業所におけるオープンダイアログ実践に関する研究発表をさせていただきました。オープンダイアログはフィンランドの西ラップランド地方で開発されてきた精神科医療のアプローチで、ご本人と家族や友人、地域の支援者等の関係者、そしてオープンダイアログを行う支援者（2人以上）が車座になって、ご本人が話したいことについて開かれた対話を行います。オープンダイアログには7つの原則や12の基本要素があり、できる限り原則に沿うことが推奨されますが、一方でオープンダイアログは柔軟であり、その国の文化や制度に合うように用いてもよいとも言われています。また、ライセンスなしの実践が禁じられているわけではありません（もちろん基本的な考え方とやり方をしっかり理解するためのトレーニングはあったほうが良いと思います）。ここには就労移行支援事業所でオープンダイアログを実践する余地があると考えられました。

就労移行支援事業所では、様々な方々が就労の準備をされ、就職、そして職場定着していきます。その過程では、職業準備性を高めたり、就職活動や企業実習を行ったりと、日々様々な目標に取り組まれます。そして、その先には就職や職場定着という明確なゴールがあります。しかしながら、就労支援は何も就労することだけを支援するわけではありません。大切なことは、働くことを通しておひとりおひとりのニーズが叶っていくかどうかです。働くことで家族との関係性を再構成したい、情熱を注いで仕事に取り組みたい、人から必要とされ期待に応えたい、仲間と協力して何かを成し遂げたいなど、その背景にはひとりひとりの大切な価値があり、その価値にもとづく生活を送りたいというニーズがあるはずです。しかし、就職するというゴールはあまりに明確なために、時にそれが唯一の目的や価値であるかのように錯覚させられてしまうことがあるように思います。そして、そこにはいつの間にか語られなくなったご本人の思いが取り残されているような気がしてなりません。オープンダイアログは上述のとおり、開かれた対話を通して、ニーズア

<http://www.japr.jp>
[Mail japr.jimukyoku@gmail.com](mailto:japr.jimukyoku@gmail.com)

ダブルテッドな支援を展開します。就労移行支援事業所でオープンダイアログを行うことは、就労を目指すに至るまでの人生において、これまで語られてこなかった真のニーズを物語ることを可能にし、そこに家族、関係機関、そして支援者の多様な声を集め、興味関心を寄せ合う対話空間を実現します。そうすることで、ご本人が望む多様なニーズに参加者が自然と気づいていくのではないかと私は期待しています。LITALICO ワークスには、サービスを利用される方々の「自分らしく働く」ことを実現していくことで、地域の人々とともに多様な個性が輝ける社会をつくるというコンセプトがあります。オープンダイアログを実践することを通して、このコンセプト沿ったに支援がより一層展開されていくことを願っています。

今回の学会では、限られた時間の中で、「オープンダイアログの効果」に関する研究発表を行いました。私の力不足もあり、「なぜ就労移行支援事業所でオープンダイアログを用いるのか」という説明の時間をとらなかった反省がありました。発表を終えて、いくつかの質問を受ける中で、そのことに気がついたのですが、期せずして、このニューズレターによりその思いを届けられるチャンスを頂けたことに感謝を申し上げたいと思います。オープンダイアログは、日本においてまだまだ発展途上だと思います。だからこそ、様々な実践報告や研究報告が求められているかと思いますが、情報は支援者だけではなく、サービスを利用される方々やその家族、またはその応用可能性が期待されるすべての方々にも広くシェアできることが望ましいと思います。その意味では、本学会は、研究者や実践家ばかりではなく、経験専門家の方も多く参加されるので、初めてオープンダイアログの研究報告を行う場としてとても良かったように振り返っています。

大会参加を通して、講演の聴講や発表を行うことは、支援者個人の成長やスキルアップにとどまらず、支援者それぞれが持つ意思や価値を共有し、それぞれのサービスを発展させていく機能があると思います。これからも継続して大会に参加し、様々な方々とつながるとともに、関わる人たちと笑顔がかわせる関係性を築いていきたいと願っています。

<http://www.japr.jp>
Mail japr.jimukyoku@gmail.com

精神障害者リハビリテーション学会大阪大会 参加者報告④

『精神障害者リハビリテーション学会大阪大会に参加して』

一般社団法人 スターアドバンス

遠藤 紫乃

今回は「たすき掛けプロジェクト」5年目の現状と課題、あなたの事業所でも初めてみませんか？！というテーマでの自主プログラムに参加した。ピアスタッフの養成・雇用に関して、1つの法人だけでは困難な様々な課題を解決するため、“目指す方向が同じ”で“距離的に活動と一緒にできる”近隣の3法人が集い、平成27年度より「自分達の地域」における「ピア活動の新しいシステム作り」を“たすき掛けプロジェクト”としてスタートさせている。その“たすき掛けプロジェクト”に関して、3法人の職員とメンバーによる自主プログラムでの発表は、高知、長野、久留米、東京、そして今回のお阪で5回目となる。ピアサポートやピアスタッフについては、近年ますますそのニーズが高まっているが、私たちは生活訓練という事業を利用しているメンバーのリカバリーという側面から、この活動を続けている。

今回は初めて自主プログラムの後半に、十分に時間を取りグループワークを行った。参加者と意見を交換し、参加者の抱えているものを共有ができたことが良かった。参加してくれた人たちは、現在ピアスタッフとして障害福祉サービス事業所で働いている人、ピア活動をしている人、今後したいと思っている人などが多かった。また、自分の勤務する事業所でもピアスタッフを雇用したいと思っているが、法人の中での合意が取れずに悩んでいる人など、様々なピアに関心のある人たちであった。昨年の東京大会に引き続き参加してくれている人もいて、このピア活動・システム作りに継続して興味を持ってくれている人がいることも分かった。

グループワークの時間には、「障害福祉サービス事業所に就職したとしても、働き続けることが難しいのが現状で、辞めてしまう人も多い」という課題について話し合い、「就労前に心理教育を受ける機会を確保することで、退職者を減らす効果が期待できると思い実践をしている」という一つの解決策を聞く事ができた。また、「法人内でのピアスタッフの雇用への合意のハードルが高い」という課題では、全員で頭を悩ませながらも意見を出し合った。短い時間だったが、どの話も今後の活動に活かせるヒントをもらったように思う。日頃の仕事の中では出会うことのない人たちと、興味あるテーマで意見交換できることは、精神障害者リハビリテーション学会における、自

<http://www.japr.jp>Mail japr.jimukyoku@gmail.com

主プログラムの醍醐味なのだと実感した。初めて会う人、その人から聞く生きた声、意見や悩み、そして共に考えること。そういった時間はすごく貴重で、また同時にとても有意義な時間であった。次回もどんな出会いがあるのかと考えると楽しみである。

精神障害者リハビリテーション学会大阪大会 研修セミナー参加者報告

『日本精神障害者リハビリテーション学会 第27回大阪大会 研修セミナーに参加して』

大迫 直樹（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域・司法精神医療研究部 所沢市精神障害者アウトリーチ支援チーム）

私は2019年11月22日に行われた研修セミナー『わかる！「野中方式」のケアマネジメント事例検討会 事例の包括的理解・検討会のすすめかた』に参加させて頂きました。

現職に就いて約1年が経過し、多種多様な関係機関との連絡・連携をすることにより利用者や家族、関係者の安心感や連帯感が増すことを実感しているところで、そんな折、同僚の勧めもあり参加することにしました。

前半の講義ではケアマネジメントの各手順のポイントなどの説明があり、ホワイトボードを用いるなど共通の認識を持てるための工夫がなされていることや生活史だけでなく、対象者がおかれてきた文化や時代背景も考慮することで、ひとりの人としてのアセスメントを深めていくこと。また、アセスメントを基にプランニングを行うに当たっては、目標を定めるだけでなく、誰がどのタイミングで行うかということなど、それぞれの役割や順序立てを明確にすることまで具体的に決めること等の話がありました。

後半は前半の講義を踏まえて事例検討を行いました。事例は準備されていたものでなく、その場で相談のあったものを取り上げることとなりました。

今回、事例検討会における植田先生の臨機応変な対応に感心しつつ、ファシリテーターの立ち回りが事例検討会を行うに当たっての重要なファクターであることを再認識しました。その一方で、自分がその立場となった時のことを考えると知識や経験が不足していることを痛感したところでもあります。研修セミナーを受講し、私は野中方式のケアマネジメントの入り口に立ったというよりはその入り口を見つけたといったところなのかもしれません。しかしながら今は講義の中で出てきた『急に全部変えるのは無理がある』『成功する目標は「出来ること」』という言葉に甘えさせて頂き、まずは紹介して頂いた本を読むことから始めていこうと思います。

<http://www.japr.jp>
Mail japr.jimukyoku@gmail.com

特別企画 I'm alive!! It's my job.

夕暮れの向日葵のごとくに

群馬県立精神医療センター

須藤友博

世界規模のコロナウィルス感染蔓延により、おそらく戦後最大の人的被害及び厳重な自粛生活を強いられていると思います。しかも日本ではコロナウィルス感染第二波の状況下で漠然とした強大な不安に加えて生活や経済など現実的な不安も表面化して、さらに長期化していることに精神的負担を抱えている方も多いと思います。

私は県立の精神科病院で精神科救急医療に従事しています。私が今回のことで改めて実感したのは、日常日頃の支援の重要性でした。例を挙げれば、訪問看護やデイケア利用が一時的に止まって、病状悪化や生活破綻した統合失調症の当事者が沢山いました。また、依存症の当事者でも、自助グループのミーティングや本人が楽しみにしていた趣味ができなくなり、入院が必要となった方が複数おりました。裏を返せば、なにげない支援者や仲間による毎日の関わりが当事者にとっていかに大切であったかを物語っています。

私を含めて支援者と言っても、何の不安もなく満足な余裕のある生活を送ることができた方はおそらく一人もおられないと思います。つまり、コロナウィルス感染蔓延によって、普段できていたことができなくなり、皆誰も日常生活に障害を受けていたと言っても過言ではないと思います。普段の当事者の状況や気持ちを期せずして体験することになり、精神障害を例にとっても強いストレス化になれば程度の問題だと言えます。だからこそ、精神医療福祉は、当事者だけでなく万人にとって必要であることを身をもって知りました。

私の勤務する病院でも、コロナウィルス感染が疑われる精神疾患の患者さんを時には防護服やフェイスマスクなどで感染のリスクを抑えながら、私達以上に不安であろう患者さんに不安や気持ちを汲んだり適切な治療や支援を行う状況が起こり、だいぶ緊張した場面もありました。いざコロナウィルス感染が病院内で出現した場合を想定して、急性期病棟医師と病棟を三グループにゾーンニングしました。昼食も病棟の中庭で十分なスペースを確保して食べたりしました。

世の中がそうであったように一時は全てを休止するという対処しかありませんでしたが、現在は十分な感染対策をした上で必要な支援は再開するという方向を打ち出しているという場所も多いと思います。私達の病院でも、厳重な感染対策の中で外来診療や入院診療に加えて、6月よりデイケアを再開しました。三密を防止するために、参加人数にも制限を設けて、プログラムを大幅に変えました。ほのぼの散歩、AHA ムービー、瞑想、朗読の会など、内容は想像にお任せします。

私達の病院の慢性期病棟群の中庭では、ジャガイモ栽培が行われています。比較的長期の入院を余儀なくされている患者さんにとって、何かを育てるという行為は気持ちの捌り所となっています。私が勤務している急性期病棟の中庭は、コロナウ

<http://www.japr.jp>

Mail japr.jimukyoku@gmail.com

イルス感染の際にも患者さんや職員に対して安全な環境を作る手助けになりました。ある時、職員の一人が中庭に向日葵の種を埋めました。こんな状況で本当に育つのか初めは半信半疑でしたが、周囲の草と区別のつかない幼少期を経て、現在は私達達を大きく見下ろす背丈に成長して大輪の花を咲かせました。

この間、中庭で夕暮れの向日葵を見ながら思いました。向日葵の花は、その種がフィボナッチ数列という数学的配列に沿っているという理性的側面、その色使いなどが画家フィンセント・ファン・ゴッホやエゴン・シーレが描き出したように感情的側面を合わせ持った存在です。理性的側面と感情的側面の調和、いまだに猛威を振るうコロナウィルス感染を生き残るうえで何かヒントになる気がしています。また、夕暮れという時間もキーワードです。夕暮れというと病棟や自宅生活でも慌ただしかったり少し不安な時間帯であると考えがちですが、良かれ悪かれ昼間を何とか悶えてのたうち回って過ごしてきたことをほんの少しでも良いから評価してあげて、ほんの少しでも良いからホッとしてあげて良い時間でもあります。少し顔を上げて一息ついて、今までを振り返って、今後を見据える時期に来ていると私は思うのです。



<http://www.japr.jp>
Mail japr.jimukyoku@gmail.com

事務局からのお知らせ

先日、11月22日に学会の総会・野中賞・BP賞優秀賞の表彰および講演会を

オンラインで開かせて頂きました。

ご参加頂きました会員の皆様方、ありがとうございました。

コロナウイルスの状況がどうなるか分からない昨今ですが、学会もオンラインに対応していくことを検討したいと思います。

皆様、くれぐれもお体ご自愛くださいませ。

吉田光爾

<http://www.japr.jp>
Mail japr.jimukyoku@gmail.com